JLSK news

関西日本ラトビア協会　ニュース

２０１０－vol.４　　第４号
発行：2010 年 12 月
編集：関西日本ラトビア協会
大阪市北区梅田３－３－５
在大阪ラトビア名誉領事館内

★★関西日本ラトビア協会　第２回　理事会・総会　開催★★

【左からオルロフス書記官・ヴァイヴァルス大使
東郷武理事長・天江喜七郎会長】

【理事会風景】

２０１０年７月３１日　於：大阪マルビル

★ラトビア大使館からヴァイヴァルス駐日全権特命大使とオルロフス書記官をお迎えして、第２回総会が梅田の大阪マルビルにて開催され、50 名越える会員の皆様にご参加いただきました。

【理事会】総会に先立って開かれた理事会では、天江会長からラトビア駐在の長内大使も、当協会の活動を大変心強いと思ってくれている。５月のリガ訪問も大変喜んでいたと報告があり理事会では自由な意見を交わしていただき今後も当会の活発な活動を続けていただきたいとのお言葉をいただきました。

またヴァイヴァルス大使へ東郷名誉領事の名誉総領事への昇格を本国へ働きかけて欲しいとの提案がなされ、大使からは規定はあるが大賛成であり少しでも早く実現するよう努力したいとの返事をいただきました。

続いて東郷理事長から、理事の見直しを行い、石原美生子常務理事の代わりに正司泰一郎理事が常務理事に、また新たに竹村肇氏、蓮池寛氏、木村宗光氏の３名が理事に就任する、また前回の総会後に正司理事の推薦で菊園武彦氏が理事就任している旨の報告があり、３年目に入る当協会の活動を、理事会全体で盛り上げていくことが確認されました。

ヴァイヴァルス大使からは、協会の活発な活動に対する感謝の言葉をいただき、ご自身の任期があと３年に延長されたことの報告がありました。

【総会】総会では、本会の活動で日本ラトビアの友好に貢献したとしてヴァイヴァルス大使から東郷理事長へ本国政府からの感謝状が贈呈されました。続いて協会の１年間の活動と収支報告について東郷理事長から報告があり、寺岡志郎監事の監査報告を経て全会一致で承認されました。

また特別講演として「木漏れ日のラトヴィア」「ラトヴィアの蒼い風」の著者である黒澤歩さんに「なぜか懐かしいラトビア」と題して自らの豊富なご体験に基づいたラトビアの人々の暮らしや文化・風土などについて貴重なお話を聞かせていただきました。講演の後は、田邊関西大使にも来賓としてお越しいただき、歌のゲストを招いた食事会が開催され和やかに懇親を深めていただきました。

当協会は、今後もラトビアからのゲストを囲んでの懇親会などを通じて日本とラトビアの友好を深める活動と情報発信を行ってまいりますので引き続きご支援ご協力をお願いいたします。（事務局）

【関西日本ラトビア協会　会報　第４号　掲載内容】

1. 第２回　関西日本ラトビア協会理事会・総会
2. 祝辞:ヴァイヴァルス大使
3. 記念講演　翻訳家・黒沢歩さん
4. 来賓挨拶：田邊隆一関西大使
5. 祝辞：長内敬在ラトビア日本国大使
6. アンドリス・ネルソンス氏来日ウイーンフィル日本公演
7. ラトビア剣道クラブのメンバー3 名が名誉領事を表敬訪問
8. 「にっぽん―大使たちの視線 2010」写真展開催
9. 【寄稿】池田裕子様（JSLK 理事・関西学院）
10. 写真展「世界を動かしたバルトの道」開催
11. ラトビア共和国独立 92 周年記念レセプション開催
12. 【寄稿】長塚徹様（ラトビア投資開発公社日本コーディネーター）
13. 【寄稿】田中徹様（元ラトビア大使館顧問）

★　関西日本ラトビア協会第２回総会　★

【オルロフス書記官・ヴァイヴァルス大使】

【総会風景】

【ヴァイヴァルス大使から感謝状贈呈】

★　天江会長の挨拶　★

★　第２回総会おけるヴァイヴァルス大使の祝辞　★

皆様にはアクティブに活動していただき大変感謝しています。ご家族ご友人を含めて、こんなに多くの方がラトビアのことを知っていただいていることが大変嬉しく思っております。

ラトビアは、ここ数年間は経済危機の時期でしたが、現在はそれも安定してきており、徐々に明るい未来が見えてきております。今後日本とラトビアの交流がますます活発になるよう祈っております。

今年は５月にリガ市に神戸市からの訪問があり、神戸を紹介する「神戸デイズ」が催されました。当協会の会員も多くご参加いただきました。大変感謝しております。

ラトビアでもメディアに大きく取り上げられ報道されていました。神戸とリガの 35 年にわたる交流は大変素晴らしいことであり、姉妹都市交流は大きな役割を果たしている。ほかにも良い提案があればどんどん出していただきたい。芸術や文化の交流も大事であるが、基本は人と人との交流である。名誉領事館を総領事館へという提案をいただいたので、できるだけ早く実現できるよう努力したい。

本国において、東郷名誉領事の活動がたいへん高く評価されております。本国より感謝状が届いておりますのでここでお渡ししたいと思います。今後ともラトビアと日本の架け橋として末永くお付き合いをいただきたい。ますますのご活躍を期待しております。

【天江会長】

今から３年ほど前に、関西駐在大使だった頃、ラトビアの名誉領事を東郷さんにお願いしました。ソ連圏の駐在が長くモスクワに駐在したこともある私にとってバルト３国はなじみが深く、ぜひラトビアと関西の結びつきを強くしたいと思っていました。東郷さんは、就任前に自らラトビアを訪問されて、「こんなすばらしい国なら名誉領事になってもいい」と快諾していただきました。

そんな私がまいた一粒の種が、東郷さんによって若い芽となり大きく育てられています。

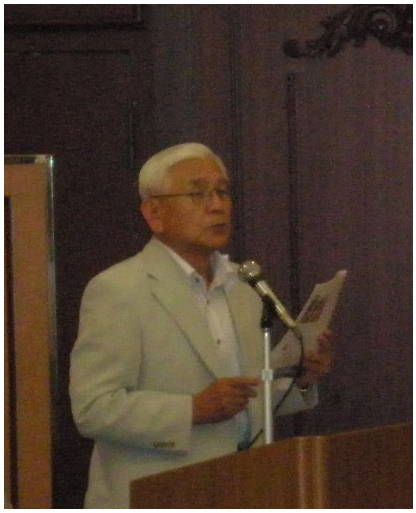
今年の５月には姉妹都市である神戸市長をはじめとするグループと一緒にリガ市を訪問していただいた。協会からも多くの方に参加していただけて大変ありがたいことです。

現地の長内大使からもお礼のメッセージが届いていた。私の後輩に当たりますが、当協会が経済の非常に厳しいときによく協力してくれたと大変感謝していただいている。

この２年間の活動を評価していただいて、ぜひ名誉領事館から名誉総領事館への格上げをお願いしたいという話を先ほどの理事会で、ヴァイヴァルス大使にさせていただいた。

大使も賛同していただき本国へ働きかけたいと言ってくれています。たいへん喜ばしいことであり、今後ますますの皆さまの活発な活動をお願いしたいといます。

★　東郷理事長の挨拶　★



【東郷理事長】平素のご支援に感謝申し上げます。

今年の５月に神戸市長とともにリガ市を訪問しました。2 年前にリガから音楽家やビジネスマンなど 70 名もの方々が来日しましたが、今回は当協会から 18 名もの方が参加して合計で 60 名ほどになり、神戸市も面目が立ったのではないでしょうか。

ドンブロウスキ首相は、今年はプラス４％の経済成長を達成できそうだと語っておられた。一年前がマイナス１１％であったから経済はすっかり回復基調に乗ってきたのではないかと思います。リガにある剣道協会の方が今年の秋に日本を訪問したいという意向があるそうで、ぜひ実現されることを望んでいます。音楽家も来日するそうですから非常に楽しみにしています。

ラトビアは小さな国ですから世界中の 190 カ国を越えるすべての国と付き合うのはなかなか大変だと思います。リガ市のウシャコフスキー市長も、すでに 23 ヶ所の姉妹都市がありこれ以上増やすのはたいへんだとおっしゃっていました。

ラトビアは西側世界に入って、まだ間がありません。しかし非常に知的レベルの高い国であり、街も非常に美しい。一方で日本人特有の浪花節的な人情が通用しないクールな国民性であるように思います。そのあたりをわきまえて、あまり見返りは期待せずにお付き合いをしていくのがいいのではないかと思っています。

５月の訪問では、リガ市内に神戸市との姉妹都市を記念した公園ができて、その除幕式を行いました。神戸を紹介する展示会がリガ市庁舎で開催されたり、神戸の混声合唱団が「アベソル」というリガの合唱団とコンサートを行うなど様々な交流イベントが開催されました。また以前、天皇陛下が植樹された桜の木の横に、今回の訪問の記念の桜が植樹されました。

今回の私たちのツアーでは、リガ市のほかにシリアラインという船でスウェーデンのストックホルムを訪れるなど、大変有意義な旅になりました。2 年後か 3 年後にはまたツアーを組みたいと思いますので、その際にはぜひ皆さんも参加していただきたい。

なお本日は、長年ラトビアで日本語を教えてこられた黒澤歩さんにきていただきラトビアに関する話をお聴きします。興味深いお話をお聞きできるものと大いに期待しております。

★平成 22 年度　関西日本ラトビア協会　理事会・総会　議案★

自　平成 21 年 4 月　1 日
至　平成 22 年 3 月 31 日

議案１：主な活動状況報告

１．H21 年度総会・理事会（平成 21 年 5 月 9 日）場所：橿原ロイヤルホテル　参加：54 名
収支内訳　収入　¥324,000　支出　¥326,520

２．オペラ歌手歓迎会（平成 21 年 8 月 23 日）　場所：大阪マルビル　参加：48 名
収支内訳　収入　¥230,400　支出　¥283,972

３．神戸･リガ姉妹都市提携 35 周年記念植樹式（平成 21 年 11 月 11 日）場所：神戸市立森林植物園　参加：58 名
収支内訳　収入　¥174,000　支出　¥165,265

４．スクリデ姉妹リサイタル（平成 22 年 1 月 24 日）場所：ザ・フェニックスホール　参加：58 名
収支内訳　収入　¥313,200　支出　¥316,530

５．関西日本ラトビア協会新年会（平成 22 年 1 月 24 日）　場所：大阪マルビル　参加：40 名
収支内訳　収入　¥320,000　支出　¥284,585

６．広報活動：
会報誌 JLSK news 発行(vol.1,vol.2)　※入会勧誘活動に積極的に活用

議案２：入会状況・収支報告

①入会状況：会員数：169 名（平成 22 年 3 月末時点）

②収支報告（単位：円）**※収支報告については監事の監査を受けております。**

前期よりの繰越金　2,106,785（大和ハウス工業からの寄付金を含む）

収　入		支　出	
会費収入	142,000	通信費	59,380
催事会費収入	1,048,400	催事事業費	1,376,872
利息	588	印刷代（会報）	303,240
		バルザム(薬用酒)購入費	68,005
		雑費	12,245
収入計	1,504,188	支出計	1,819,742

次期への繰越金　1,791,231

議案３：今年度活動計画案について

広報活動：JLSK ニュース発刊

交流活動：会員懇親会等の企画・開催

その他　：入会促進活動

★★　関西日本ラトビア協会の概要について　★★

役員一覧（敬称略）

名誉顧問　ペーテリス・ヴァイヴァルス（ラトビア共和国大使）

会　長　天江　喜七郎　（前外務省関西担当大使）

理事長　東郷　武　（在大阪ラトビア共和国名誉領事）

常務理事

上野　慶三　（リガ　ウッド　ジャパン代表）

権藤　眞禎　（元神戸動物園長）

正司　泰一郎　（元宝塚市長）

理事

有友　美智男　（元伸和エージェンシー社長）

池田　裕子　（関西学院　学院史編纂室）

石原　美生子　（染色家）

市嶋　久嗣　（関電不動産）

大國　利雄　（ディーワン　社長）

岡田　博　（イヌイ　常務取締役）

岡林　昌弘　（元運輸省）

小原　英明　（大阪中部ライオンズ）

小林　正明　（大和ハウス秘書室長）

住江　六郎　（合唱指揮者）

橘　英三郎　（大阪大学名誉教授）＊監事兼務

田中　健造　（神戸市議会議員）

谷本　瑞絵　（ステンダース　ジャパン　代表）

寺岡　志郎　（大阪日本ポルトガル協会）＊監事兼務

東郷　久野　（宝塚演奏家連盟）

浜田　諭稔　（願成寺　住職）

藤本　昌男　（元園田学院女子大学教授）

風呂本　武敏　（愛知学院大学客員教授）

森脇　洋子　（宝塚市国際交流協会相談役）

山原　一晃　（竹中工務店顧問）

山本　敬子　（宝塚市会議員）

金井　雅孝　（大和ハウス秘書次長）＊事務局長兼務

※会員の皆様のお名前を最終ページに記載しております

関西日本ラトビア協会　規約（抜粋）

【会の目的】

ラトビアの文化、スポーツ、経済等で日本との交流に関する情報を集め、会報を通じて発信する。

ラトビアから関西を訪問する人達と交流し、活動を支援する。

関西からラトビアに観光その他の目的で訪問しようとする人達の企画を支援する。

【会員】

会の目的に賛同し、興味をもって参加される人はどなたでも会費を払って登録できる。

【会費】

入会金 1,000 円　年会費 3,000 円とする。

【講演会】

なぜかなつかしいラトヴィア　――自然との共生、文学の翻訳――　講師：黒沢　歩さん

「なつかしい」という言葉をキーワードに、スライドや合唱祭の映像を使って豊かな自然と共生するラトビアの人々の暮らしと文化をご紹介いただきました。ご参加の皆さんは、ラトビア文学の翻訳を通じてラトビアの魅力を伝え続けておられる黒沢さんの熱い思いを共有するとともに、われわれにとっての原点、日本人が忘れかけている何かを思い起こすきっかけをいただいたのではないでしょうか。

【黒沢歩さんとヴァイヴァルス大使】

【自然の中に自らを置いた暮らし】

ヴァイヴァルス大使のご臨席のもと、お話できることは大変光栄なことです。

本日のタイトルは**「なぜかなつかしいラトヴィア」**とさせていただきましたが、ラトヴィアに行った多くの方からこの言葉を聞きます。また日本の学生たちに「夏至の祭り」や「合唱祭」を紹介すると「こんなに豊かな自然に恵まれ、素敵なお祭りがあり、ゆったりした時間が流れていてうらやましい」と言います。未知の国であるはずなのに、どこか懐かしく、ほっとする、そういう国がラトヴィアです。

それはなぜでしょうか？

日本とラトヴィアに共通するのは、「四季の自然の美しさ」です。しかしラトヴィアの人々は日本人に比べて、より四季の自然を楽しんでいるように思います。

春には白樺のジュース、夏は湿地帯に野生するコケモモのジャム、秋は森にきのこ狩り、冬はもみの木を探してクリスマスツリーにする。常に人の立ち入る森はきちんと下刈りされて、きれいに維持されています。このようなラトヴィアの森は国の経済にとっても大切な資源です。

それに対して私たち日本人にとっての自然は、見たり、写真に撮ったりするだけのものになってしまったのではないでしょうか。ラトヴィアでは自然が身近にあって暮しに溶けこんでいます。自然の中に自らを置いて暮しているといえるのではないでしょうか。

私はリガに 15 年間住みました。その間何度か病気になりましたが、そのたびに民間療法を教わりました。たとえばキャベツの葉は、やけどや切り傷に効き目があります。また風邪を引いたときはウオッカがお勧めです。「飲むのではなくガーゼに浸して背中やのど、足の指先から太ももまでしっかりすり込んでみなさい」と言われました。菩提樹の葉のお茶も発汗作用に優れています。

医者に診てもらって処方された薬を買う前に、昔から伝わる知恵が今も広く日常的に使われていることは大変興味深いことです。

【ラトヴィアの地方都市の暮らし】

ルーイエナという地方都市に住む**サンニア**さん一家の暮らしぶりをご紹介したいと思います。ルーイエナはヴァイヴァルス大使の出身地であり、一昨年北海道の東川町と姉妹都市提携が結ばれ、多くの交流が実現しています。位置的にはリガから北へ 150 キロほどいったエストニアとの国境に近い小さな町です。

ある夏の休日の午後に遊びに行くと、庭先で出迎えたサンニアさんは、私に向かっていきなり「さっさと靴をぬいで！」と言いました。見ると子供たちも皆、裸足で走り回っています。夕食には近所の方もたくさん集まってくれてちょっとしたホームパーティになりました。彼女の母親が民謡のサークルに入っていてその仲間も来て歌を披露いただきました。

小さな川沿いの 12ha もの広大な敷地に建つ母屋。食料貯蔵庫の地下スペースのあるお宅です。彼女はアラフォー（40 歳前後）という年齢で、ご主人は木材の加工品を国内外に販売する地域性を生かした事業を営んでいます。7−8 年前にこの川沿いの土地を買って木を伐採して家を建て、芝を植えたそうです。

この土地の人々は毎週土曜日にはサウナに入る習慣があるそうですが、彼女たちも川にサウナ付のボートハウスを持っています。夏はボートから川に飛び込んで暑さを吹き飛ばし、雪が積もる冬はスキーを楽しみます。スキーで職場にも行けるそうです。広い敷地を二人がどのように手入れしているのか不思議でしたが、帰宅後に仕事のストレスを発散するのが畑仕事であり、芝刈りであったりする。彼女はそんな仕事をするのが楽しくてしょうがない様子でした。

ラトヴィアの自然を愛でながら暮らす暮らしぶりは、民謡を歌い継ぐ母親から地域に密着した林業を営む若い夫婦に受け継がれ、そして自然の中で動物を見たり育てたりしながら、のびのびと成長する子供たちにもしなやかに受け継がれていきます。

こうした暮らしぶりに触れることで、私たちは普段忘れかけていた原点に立ち戻ってどこか懐かしくなるのではないかと思います。

【ラトビア文学の翻訳について】

私は最近、3 つのジャンルの翻訳に携わっています。１つ目は、ラトヴィアの近代短編小説で、これは年内に出版される予定の「東欧現代短編集」に収められる予定です。短編集のテーマは東欧 10 カ国の短編を集めるわけですが、**ファンタスチカ**（幻想的な）なジャンルがテーマになっています。作品選びに苦労しました。結果的に選んだのは**「ダウガワ河」**に沈んだ船と娘をめぐる愛の物語です。ヨーロッパならではの伝説をベースにしていますが、それだけではなくラトヴィアを行き交った多くの民族が登場する複雑な歴史をも思わせるもので、ラトヴィアらしい色合いをにじませる作品になると思います。これが出版されたらぜひ皆さまにも読んでいただきたいと思います。

2 つ目は、しばらく前から手がけている長編で元ラトヴィアの外務大臣を務めた方の自伝です。一家のシベリア追放という生々しい近代史の物語です。これは長編ですのでまだしばらく時間がかかるものと思います。

そして 3 つ目は、日本の詩をラトビア語に翻訳しています。毎年秋にラトヴィアでポエトリーリーディング（詩の朗読会）が開催されており、近年日本からも多くの詩人が参加するようになりました。今年も 9 月に参加する詩人の詩を翻訳しているところです。

今年その会に参加する予定の歌人**紺野万理**さんは、自らの短歌集に英語とラトヴィア語訳をつけた 3 ヶ国語の短歌集を作られました。この本がきっかけで 8 月から一か月間ラトヴィアに滞在されるそうで、また新たな短歌が生まれるのではないかと思います。

このポエトリーリーディングに 2005 年に参加して、リガに数日間滞在した詩人の**白石かずこ**さんがその印象を「このやさしい静けさはなんだろう。この場所はなぜ子供の頃を思いださせてくれるのだろう。何が私を心穏やかにするのだろう。私の心が美しく静かな詩のように波打つのはなぜだろう。ライ麦パンなどの食べ物、それにラトヴィア語？それだけではない。ここにいると幼い頃の遠い記憶の秘密の物語のページをめくるような気がしてくる」と語っておられます。当時 85 歳の詩人にとってもラトヴィアには、どこか懐かしい魅力をたたえた場所だったようです。

【日本文学とラトヴィア文学】

ラトヴィアでは、戦前 1921 年に「日本の詩歌」として和歌と俳句が紹介されたほか、1931 年には「日本の民話」も出版されています。戦後になると清少納言の「枕草子」など古典の一部抜粋や古今の和歌、谷崎潤一郎、三島由紀夫、芥川龍之介、現代では大江健三郎、村上春樹や村上龍まで多数翻訳されて、読み親しまれてきました。これに対して日本におけるラトヴィア文学の紹介は、未だにほぼゼロに等しいと言えます。翻訳文学の輸出入に関して両国は圧倒的に不均衡の状況にあります。

ラトヴィア文学の邦訳は自費出版を除いては唯一、民族の英雄叙事詩**「勇士ラチプレシス」**（1954 年）があるだけです。これはソヴィエトの SF 小説の翻訳者だった**袋一平氏**によって翻訳され講談社の世界名作全集として出版されました。この本は 2007 年天皇皇后両陛下がラトヴィアを訪問された際に大統領から皇后様に贈られたものですが、日本には国会図書館と他一箇所にしか残っていません。それほど貴重なものです。

これ以降翻訳はほとんどありませんが、ノーベル文学賞に常にノミネートされるような優れた文学者はいました。詩人**ビズマ・ヴェルシェビツァ氏**（故人）です。結局受賞しませんでしたが、2003年に**J・M・クッツエー氏**が受賞した年、朝日新聞の文芸コラムで担当記者が「ノーベル文学賞にノミネートされるような立派な詩人であるのに日本には邦訳もなければ研究者もいない」と嘆く記事を書いておられます。こうしたことからも私はラトヴィア文学の翻訳を志すものとしてこれからなすべきことは山ほどあり、そのやりがいは計り知れないと思っています。

【2008 年の合唱祭から～民族の象徴「ダウガワ河」～】

2008 年に行われた合唱祭で歌われた **2 つの曲**をご紹介します。今年も青少年による合唱祭がありましたが、2008 年は全国的な大きな合唱祭で、私も現地で聴いていました。この 2 曲を選んだ理由は、ラトヴィアを 2 分して流れる大河**「ダウガワ河」**が重要な役割・テーマを担っているからです。

ラトヴィア人にとって切っても切り離せない河であり、民族の運命を見守ってきた「象徴的存在」と言えます。その気持ちがよく表れている作品です。

先ほど私が翻訳していると申し上げた現代作家の短編小説も、戦後に袋一平氏が訳した作品も、どちらもダウガワ河をテーマにしています。

１曲目は**「サウレ、ペールコンス、ダウガワ」**という曲で、訳せば「太陽・雷・ダウガワ河」となります。歌詞を書いたのは20世紀初頭のラトヴィアの代表的な詩人**ライニス氏**で、メロディは現代の作曲家によって新しく付けられました。ここに歌われている歌詞はダウガワ河がどのようにできあがったかというラトビアの神話を語っています。

2曲目は**「マナイ・ジムテネイ」**という歌で**「わが祖国に」**という意味です。これは「マーラが与えた人生」を作曲した**ライモンズ・パウルス**さんの曲で、自ら演奏されています。

「合唱祭」は夏至の夜の 7 時ぐらい、まだ日が長くて明るい時間に始まります。そしてこの 2 曲が歌われたのは、長い長いお祭りのフィナーレ、最後から 2 番目と 3 番目という、夜も更けて 11 時過ぎの頃です。3 時間 4 時間という長いコンサートを経て聴衆が最高潮に達して高揚している様子が感じられるのではないかと思います。

2 曲紹介しましたが、曲と曲の間には 2 回アンコールがあって大変盛り上がっています。拍手も鳴り止みません。歌う人と聴く人の心の交流や高揚があります。

この合唱祭は 5 年に 1 度のイベントですが、3 年ぐらい前にはプログラムが決まり国中の市町村に配布されます。それから各地の合唱団は、地域ごとの代表を決める予選大会を開きます。まるで日本の高校野球の甲子園のようです。地域で選ばれたグループしかリガで行われる晴れの舞台には登れないのです。

【終わりに】

ラトヴィアは、日本ではまだまだ知られていない国です。最近、国際的に活躍されている作家・池澤夏樹さんが世界文学全集を新しく出され、その中には欧米だけでなく中南米・アジア・アフリカの作品も数多く載せておられます。しかしその池澤さんでも「ラトヴィア語とリトアニア語は、まだ聞いたことがない」とエッセイに書いておられました。そのぐらいまだまだ知られていない言語であり文化であると言えます。

私はこれからもラトヴィア文学の翻訳を続けていきたいと思いますが、それが少しでも多くの方がラトビアについて知っていただくきっかけになれば幸いです。本日このような機会をいただきまして私の関わっている

ラトヴィアの一面を紹介させていただくことができて感謝しております。ご静聴ありがとうございました。

以上

【プロフィール】黒沢歩さん

黒沢さんは、大学卒業後、1991年ソヴィエト崩壊後のモスクワに語学留学され、1992年来日した当時のラトヴィア共和国の文化大臣ライモンズ・パウルス氏と出会いラトヴィアに関心を持たれたそうです。

1993年には首都リガの日本語学校へ日本語教師として赴任され、平行してラトビア大学でラトビア文学を学ばれました。卒業後はラトヴィア大学の日本語講師となられ通訳者、翻訳家として活躍されました。

2000年に開設された在ラトビア日本大使館勤務を経て、2006年にはラトビア大学現代言語学部日本語講師も勤めら、2007年天皇・皇后両陛下のラトヴィア訪問でも通訳を務めらました。

著書「木漏れ日のラトヴィア」（2004年）、「ラトヴィアの蒼い風」（2007年）（共に新評論刊）は、日本にとって未知で遠い国・ラトヴィアの全てを足で取材されており、ラトヴィアを知るためのバイブル的名著として知られています。「ラトヴィアの蒼い風」には、信頼が厚いヴィーチェ・フレイベルガ大統領（当時）自らが、巻頭に称賛のメッセージを寄稿されました。

ラトヴィアを愛し、あらゆる分野で日本とラトビアの親善を深める努力を続けておられます。

【参考資料】2007年7月10日号　日本ラトビア音楽協会ニュース（徳田浩編集長）より抜粋

天皇皇后両陛下のラトヴィア御訪問

ラトヴィア・リーガ在住　黒沢　歩

5月25日、30度を越すような炎天下の正午、リーガ空港から直行した車を大統領官邸のあるリーガ城前で両陛下が降りたとき、頭上を白い鳩が飛び去ったそうです。それから大統領ご夫妻とのご歓談は弾んだ様子。というのは、次の献花式が予定されていた自由の記念碑前で待つ宮内庁と外務省のスタッフ、通訳の私も、沿道で待ち構える市民と同様に30分以上も待ったからです。私のつま先は履き慣れないパンプスの中で燃えるようでした。ご到着後、天皇陛下は大統領と軍の吹奏楽団による演奏の中を進まれて献花した後で、沿道の大勢の人や在留邦人にお声をお掛けになりました。

大統領主催の午餐会は、ブラックヘッドの館にて行われました。閣僚と国家要人のほか、日本に縁のある方々が揃いました。そこに私も招かれていたので、自由の記念碑前から5分で移動するのが大変でした。午餐会では、大統領がラトビアと日本との豊かな交流につきお話しになり、天皇陛下はラトビアの歴史に触れながら独立回復後の繁栄を讃えました。大統領ご用達のリーティンシュ・シェフはカマスと鶏肉料理を用意し、日本から運ばれてきたマツタケに舌鼓を打ちました。

引き続き占領博物館をご見学になり、一連の外国要人を迎えるラトヴィア側プログラムが終わると、夕方に組み込まれたのが日本研究者・日本語学習者との交流です。大学生が日本語を初めて実践で使った相手が天皇皇后とは、まったくこれ以上の刺激があるでしょうか。

ラトヴィア大学をご訪問した天皇皇后両陛下に、日本学コースの二人の学生代表（男女それぞれ20歳）が日本語でした発表は次のようなものです。私たち講師が率先して二か月前から学生のアイデアを募って準備した発表の内容が、今次ご訪問にてラトヴィアの歴史に触れた天皇陛下のお話と偶然にもよく呼応したものとなりました。

こんにちは！　私たちはラトヴィア大学アジア学科を代表してラトヴィアの国の歴史についてお話したいと思います。民族の心がどう変わったのかを、詩を用いて表現したいと思います。まず、古い子守唄を歌いますのでお聞きください。

揺り籠よ　揺れよ
坊やが元気に育つように

主人は兵士を待ち望んでいる
父と母は畑の耕し手を待ち望んでいる

この子守唄は、両親が心配する心を歌っています。昔、戦争が多かった時代に、ラトヴィア人の農民は戦に駆りだされました。そのため、若者の母親は悲しみました。息子が戦場で死んでしまったら、誰がこの家を守っていくのか、と悩みました。当時、人々は家族のことだけを心配しましたが、今では人々は民族全体のことも考えるようになりました。ラトヴィアの歴史は辛い時代がありましたが、ラトヴィア民族は今、誇りと幸福を感じています。

次は現代詩です。この詩にはラトヴィア民族と自然の関係がよく表れています。前述の子守唄に比べて、ここでは喜びの気持ちがよく見られます。「白樺」という詩です。

我が大地の良き暮らし
他にどこにあるだろう
山を越えてやってきたのは
木皮の長靴を履いた白樺だ
堂々と誇り高く
胸を高く張っている

天皇とフレイベルガ大統領談笑の通訳する筆者（中央）

白樺がこんなに白いとは
ほかに比べようもない誇らしさ
すると我も誇りを持つ
いずこも誇りに満ち溢れている
のはなぜか。
「お前のお陰さ」と言う白樺に
我は答える「貴方のお陰です」

自分のことを誇りとする白樺の気持ちが人々にも影響を与えます。民族と自然は互いに欠かせない存在なのです。白樺は独立を回復したラトヴィアを象徴しています。辛い時代も良き時代も含め、歴史があってこそ現在の私たちがあります。過去を忘れず、誇りを持って将来に向っていきたいと思います。

子守唄は詩と共に言語で歌われ、その清らかな響きがご多忙な日程の中でも天皇皇后両陛下のお心に響いたであろうと期待せずにはいられません。ラトヴィアご滞在はほんの一日ではありましたが、それはメディアがこぞって日本に強い関心を示し、ラトヴィアにおける日本が脚光を浴びた一瞬でした。日は過ぎて、ラトヴィアではすでに新しい大統領が就任しようとしています。ひとつの時代が閉じようとする真夏日のリーガより。

★　田邊大使の挨拶　★

【来賓挨拶：田邊隆一関西大使】

関西大使として海外からの賓客が来阪されると日本政府の代表として接遇をしていますが、今「関西ファースト」ということを提唱しています。ポーランド大使時代に始めたのですが、海外から日本に行く際に、いきなり東京に行かないで、まず関西を訪れていただくようにお勧めしてきました。関西の歴史と文化を見ていただいて、あるいはハイテクを見ていただいてから東京へ行っていただく。昨年 10 月からそういうキャンペーンを行っています。19 人の総領事と 58 名の名誉領事・名誉総領事がおられますので、それら領事国との関係を大事にしていく。関西には関西広域機構の定義に基づいて関西 10 県福井・徳島・鳥取までを担当しております。すべての県をまわり知事や商工会議所との関係を深めるために今までに 17,000 キロも車で走っております。そういうことで関西をいかに海外にプロモートするかも私の大きな仕事であり、関西経済界とも一緒になってやっております。それからもちろん文化交流等も含まれております。ひとりですのですべてはできませんが、全力を尽くしているところです。

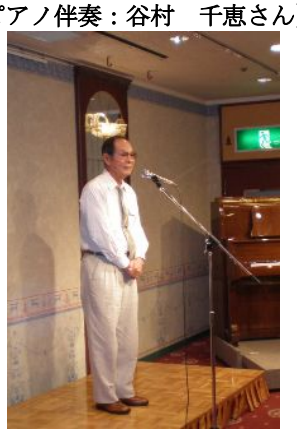
私のこれまでの海外の経験は、ヨーロッパに 18 年、ドイツ 4 回オーストリア、セルビアモンテネグロ、ポーランドに勤務しました。東京ではアフガニスタン関係の特命全権大使としてカブールに何度も足を運びました。ドイツでは丁度ベルリンの壁が崩れる時でした。その後はサウジアラビアに行き、湾岸戦争にも直面しました。そのあとユーゴスラビアの紛争にウイーンとモンテネグロから主に復興についての仕事をしました。東京都庁で 4 年間、石原知事と一緒に仕事をしました。また 9.11 にもワシントンに出張中に遭遇しました。ポーランドに赴任中の 3 年間には日本企業が 100 社も進出されました。このように海外で様々な経験をしてきました。
関西に戻ってきまして故郷に戻ってきた感じです。京都の綾部市の出身で高校まで綾部で過ごしました。関西と海外との関係が深まっていくよう微力ながら力を尽くしたいと思っています。

日本と EU、日本とラトビアの関係は深まってきたがさらに強化していきたいし、強化していく必要があります。世界の中で民主主義の国はまだ過半数になっていません。そういう意味で非常に複雑な時代ではありますが、基本的人権の尊重、市場経済など共通の価値観、国々との連携を深めて行くことが日本にとっても非常に大事ではないかと思います。

本日はこのような機会に参加できまして大変光栄に存じます。この協会の益々のご発展、日本とラトビアの関係がさらに深まって行かれることをお祈りして私のご挨拶とさせていただきます。ありがとうございました。

【歌のゲスト　シャンソン歌手：村山奈緒美さんとピアノ伴奏：谷村　千恵さん】

【和やかな懇親会風景】



【権藤常務理事　中締め】

【乾杯：上野常務理事】

この協会のおかげで皆さんとお知り合いになれて本当にうれしく思っています。今日は黒澤歩さんが来ていただきましたが、黒澤さんは2007年にラトビアを天皇皇后両陛下が訪問された際に通訳をされておられ、私も拝謁をさせていただきました。

今年は5月に16名プラス私と寺岡さんが参加してラトビア、フィンランド、ストックホルムを回りました。その中に元神戸市の職員で、リガと神戸の姉妹都市提携に貢献された権藤さんと大野さんもご一緒されておられました。大野さんは、神戸市を退官し、まさにこれから奥さんと一緒にゆっくりと海外旅行でもしようと思っていた矢先に目を悪くされ全盲になられたそうです。今回はその大野さんがご夫妻で参加されました。少し心配をしていたのですが、道中全員が本当にファミリーのようになって大野さんご夫妻と接している姿を見て、ものすごく暖かく感じました。ご夫妻にも本当に楽しいツアーだったと喜んでいただいて私は本当にうれしく思いました。どんな方が訪れても、たとえば今回のように全盲の方が訪れても、ラトビアという国は楽しんでいただける国であると改めて心を強くした次第です。ですから足の悪い方、腰の悪い方、色々な病気を持っている方、どんな方でも暖かく迎えてくれる国、それがラトビアという国です。平和で安全な国ラトビアをぜひ皆さんも一度お越しください。では皆さんのご健康を祈ってラトビア語で乾杯したいと思います。**「ウズベッサリ！（健康に！）」**

【中締め：権藤常務理事】

本日はヴァイヴァルス大使、天江会長をお迎えし、このように多くの人に参加していただいて盛大に催しができたことを大変うれしく思います。これからも東郷名誉領事と一緒にこの会を盛り上げていきたいと思います。

私は35年ほどリガとお付き合いをしてきました。36年前、神戸とリガが姉妹都市になりましたが、最初どんな交流をするかと言えば、だいたい動物交流です。ラトビアからはまず、ビーバーが贈られてきました。われわれはそれまでビーバーを飼育したことがなかったので、大慌てで勉強してケアをしました。一方ヨーロッパにはサルがいませんので、寒いラトビアには寒さに強いニホンザルがいいのではないかという話になり、日本からはニホンザルを贈りました。このようないきさつで私のラトビアとの関わりが始まり、その後も絶えず動物交流を行ってきました。最後に私が動物園の園長の時、リガ動物園生まれのメス象の「ズゼちゃん」をいただきました。当時動物園には年寄りのゾウしかおらず、新しいゾウを一生懸命探していました。そんな時リガ動物園にメス象が生まれたと聞きました。丁度阪神大震災の直後でしたから、笹山市長に相談すると「震災に遭った神戸の子供たちを元気付けるためにもぜひゾウをもらおう」と言うことになり、神戸市長からリガ市長あてに手紙を書いてもらい「ズゼちゃん」をいただくことになり、その後ズゼちゃんは子供を生んでくれ、神戸の子供たちに勇気を与えてくれました。
それまで日本の動物園でアジアゾウの子供が生まれたことはありませんでしたから、非常に感謝しております。

私は東郷名誉領事が関西日本ラトビア協会を始めると聞き、たいへんうれしく思いすぐに入れてもらいました。今回も東郷さんはじめ皆さんと一緒にラトビアへ旅行ができて、リガの古い友人にも会うことができたいへん喜んでおります。末永く文化交流など色々なことをやって民間交流に努めていきたいと思います。その後は皆さんのご努力で経済交流にまで進んでいけばいいのではないかと願っております。

★在ラトビア日本国特命全権大使　長内　敬様からも祝辞をいただきました★

関西ラトビア協会の皆様、総会の開催おめでとうございます。

昨年春ラトビアへの赴任前に皆様にお会いしたことを懐かしく思い出します。また今年の5月には、神戸市の代表団がリガ市を訪問した際に、東郷名誉総領事や10数人の協会の方々と再会できました。7月、リガは連日30度以上の異例とも言える暑い夏を迎えています。そう言えば、今年の冬はラトビアにも大寒波が押し寄せ、沖合のバルト海が30数キロにわたって厚い氷に覆われました。

しかし、こうした天候の厳しさ以上に、人々は苦しい生活に直面しました。

昨年の経済成長は前年に比べマイナス18%、失業率も17%にまで悪化しました。職を失い、給料が下がり、現在の生活や将来への不安がつのるなかで、人々はよく耐えてきたと思います。私が着任したのは昨年3月ですが、それ以降、リガではデモなどで騒動はおきていませんし、地方もおしなべて平穏でした。そうした経済にもようやく回復の兆しが出始めています。貿易も上昇機運に乗り失業率も毎月下がってきています。内外の専門家も、ラトビア経済は最悪の時期は脱したとの見方では一致しています。これから完全な回復軌道に至るまで道は決して平坦ではないでしょうが、ラトビアの人々にも余裕が出てきました。

7月第2週の週末、18歳までの生徒が参加する5年に一度の歌と踊りの音楽祭が開かれました。ラトビア全国から選抜された2万5千人の生徒達が歌い踊り、それはまさに、苦しみを乗り越えて、生きる喜びを爆発させるかのようでした。ちなみに大人が加わる4年に一度の大音楽祭は2年後の7月です。ラトビアは苦難の国造りを進めながら、その時も喜びを体一杯に表現することでしょう。皆様も機会をつくって、ぜひラトビアをまた訪れてください。

関西ラトビア協会のますますの発展をお祈りします。

★　ウィーン・フィルハーモニー ウィーク イン ジャパン 2010　★
ラトビア出身の指揮者アンドリス・ネルソンス氏が来日　　2010 年 9 月

ウィーンの伝統を現代に継承し、オーケストラ界の至宝と言われる「ウイーン・フィルハーモニー管弦楽団」の日本公演に、指揮者としてラトビア出身の期待の新星、アンドリス・ネルソンス氏（32 歳）が来日、各地の公演でダイナミックかつ繊細な指揮を披露し満場の喝采を浴びました。

※ネルソンスさん指揮の公演
2010 年 11 月 1 日（月）サントリーホール　大ホール
2010 年 11 月 2 日（火）川口総合文化センターメインホール
2010 年 11 月 4 日（木）サントリーホール　大ホール（特別公演）
2010年11月5日（金）ミューザ川崎シンフォニーホール

【アンドリス・ネルソンス氏】

【ウエルカムパーティにて挨拶】

【プロフィール】
ラトビア出身の指揮者として今後の活躍が期待される若き新星

1978 年リガ市生まれの 32 歳、幼少時からトランペットを学び、ラトヴィア国立歌劇場管弦楽団のトランペット奏者として活躍した。その後巨匠マリス・ヤンソンス氏のもとで指揮を学び、2003 年からラトビア国立歌劇場の首席指揮者に就任、オペラを多数手掛け脚光を浴びた。ウィーン国立歌劇場には 2008 年にデビューし、以降たびたび登場している。

【特別協賛の大和ハウス工業樋口武男会長と】

【大和ハウス村上健治社長とヴァイヴァルス大使】

★ラトビア剣道クラブのメンバー3名が名誉領事を表敬訪問★

10月25日（月）

姉妹都市である神戸市とリガ市はスポーツの面でも交流を行っていますが、特に剣道の交流は活発に行われています。その基盤を作られた神戸市の平田純一氏が、このたび名誉領事館にラトビアの若き剣士たちをご案内いただきました。

写真：左より　アレクサンドル・ポポビッチさん（剣道初段）ウラジミール・キンジュリスさん（剣道三段）
東郷名誉領事、アーニス・ブルメリスさん（剣道一級）、平田純一様

剣道交流は、2004 年に両市の間にスポーツ交流が正式に調印された翌年、当時神戸市剣道連盟の理事で神戸市役所剣道部副部長であった平田氏が単身リガ市を訪問したことから始まり、2006 年にはリガ市から 9 名の剣道愛好家が神戸を訪れ交流稽古が行われました。それ以来、毎年のように両国の剣士たちが互いに訪問し合いながら剣の腕を磨いておられます。今年は 10 月 20 日～25 日の日程でリガ市より 3 名のラトビア剣士が神戸を訪問し、忙しいスケジュールの合間を縫って名誉領事館を訪れてくれました。剣道 3 段のキンジュリスさんは、今年の 8 月末にリガ市で行われたラトビア剣道チャンピオンシップ大会で見事優勝されました。

【ラトビア剣道クラブの概要】

1996 年に、現会長のウラジミール・キンジュリスさん他、数人の愛好家が集まって剣道を始めたのが最初である。現在では約 20 人の愛好家が、主として、剣道、居合道、杖道、弓道を学ぶことを目的として活動しており、ヨーロッパ剣道連盟、世界剣道連盟にも加入している。
当初から、フィンランド剣道連盟とは強い関係があり、定期的にフィンランドの先生方にリガに来てもらい練習をしていた。2006 年の 3 月には、フィンランドや、隣国エストニア、姉妹都市のサンクトペテルスブルグから剣道のチームを招き、山形大学等の日本の大学のチームも参加して、バルト諸国の中で初めて、剣道の大会が開かれた。日本からは、山形大学の竹田先生が、毎年学生を連れてフィンランドやエストニアを訪れており、それらのセミナーに参加して剣道交流を行っている。

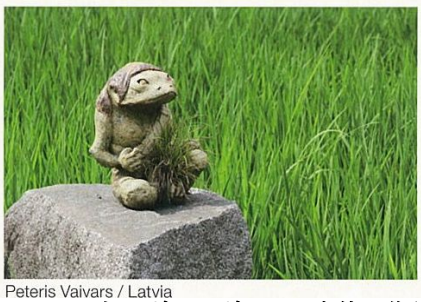
★「にっぽん―大使たちの視線 2010」写真展　が開催されます★

平成 22 年 12 月 15 日（水）～1 月 27 日（土）

於：ひょうご国際プラザ交流ギャラリー（神戸市）

ラトビア大使館ヴァイヴァルス大使とオルロルフ書記官も毎年投稿されている、各国駐日大使、外交官による写真展「にっぽん―大使たちの視線 2010」が神戸でも開催されています。
今年は、「Old&New」と「匠 TAKUMI＝Craftsmanship」をテーマに、日本の街や人々、文化・習慣を個性的な視線で切り取った作品が多数紹介されました。
ちなみに今年はラトビア大使館のお二人の作品は、案内用チラシに堂々と掲載されていました。

写真展チラシ（部分）



Peteris Vaivars / Latvia

Olegs Orlovs / Latvia

左：ヴァイヴァルス大使の作品　右：オルロフス書記官の作品

寄稿　ラトビア人飛行家ヘルベルトス・ツクルスの日本訪問－後編－

当協会理事　池田裕子様

航空ページェントですっかり人気者になったツクルスの帰国の日が決まりました。6 月 8 日午後 5 時、赤坂榎坂町のラトビア領事館（ハンターの事務所が領事館を兼ねていました）でツクルスを送るカクテル・パーティーが開かれました。翌日の朝刊によると、パーティーには各国外交官と陸海軍航空関係者併せて数百名が出席したそうです。会場で、東京朝日新聞社からツクルスに、滞在中の記念写真と記念品が贈呈されました。その中に飯沼飛行士と並んだ写真を見つけたツクルスは「『こちらは最短記録、僕の方は最長記録、飯沼さんの記録は破られても僕の記録は破られることはありませんよ』と愉快そうに爆笑した」とあります。なお、ハンター領事からツクルスに贈られた土産は、三越百貨店や銀座の和装品店で誂えた羽織、仙台平の袴、帯、足袋など和装一式だったそうです（ハンター側近から得た情報として、本稿前編に目を通された『日光鱒釣紳士物語』の著書福田和美さんよりご教示いただきました）。

6 月 10 日午前 7 時 35 分、ツクルスは羽田を離陸し、大阪に向かいました。羽田で最後の点検を終え、見送りのグレアム副領事、荒木航空局総務課長、福士東京飛行場長、帝国飛行会加治木中佐等と別れの杯を交わしたツクルスはこう語りました。「日本の皆様のご好意は感激の外ありません。日本航空界の将来の発展を祈ります」。

大阪の木津川飛行場（大阪市大正区。1939 年に現在の大阪国際空港＜伊丹＞に拡張移転）には 10 時 10 分に到着しました。先回りしていたハンター領事等に迎えられたツクルスは、給油の後、蔚山（ウルサン）に向け飛び立ちました。

1 年間の休暇を利用してヨーロッパ－日本間の単独飛行に挑戦したツクルスでしたが、往路に時間をかけ過ぎたため、復路は急ぐ必要がありました。10 日午後 2 時 46 分、蔚山に着陸、給油後、午後 6 時 10 分には京城（ソウル）到着。こうして順調に帰国の途に着いたかに見えたのですが、12 日午前 6 時 32 分奉天（瀋陽）出発後、予定時刻を過ぎても目的地天津に姿を見せませんでした。6 月 13 日付け朝刊は「“漫歩機”雲隠れ　ツ大尉支那で消息絶つ」と報じています。

安否が案じられたツクルスから天津に電報が届いたのは、14 日午後 5 時のことでした。奉天出発後、天津ではなく、青島に向かっていたのです。青島飛行場は街から 10 キロも離れており、電報を打つ設備もなかったことから情報が途絶えていたのでした。ツクルスは、14 日朝には青島から上海に飛んでいました。

7 月 16 日午後、ツクルスは無事リガに帰り着きました。半年以上かかった往路に対し、復路はわずか一月強で飛んだことになります。その全飛行距離は 44,000 キロだったと、7 月 25 日付け朝刊はリガ発同盟として伝えています。

ラトビアにとって、1937 年はこの愛すべき冒険野郎の快挙だけでなく、超小型カメラ・ミノックス発売の年としても忘れることはできません。しかし、このあと世界情勢は急速に緊迫化して行きます。ツクルスがリガへの帰途にあった 7 月 7 日、北京近郊で盧溝橋事件が起こり、日本と中国は戦争状態に突入しました。日本で親交を結んだ飯沼も、大冒険を終えラトビアに戻ったツクルス自身も、歴史の波に飲み込まれて行きます。

1941 年 12 月、陸軍に徴用され、プノンペンにいた飯沼は、真珠湾攻撃のわずか 3 日後、走り始めた機体のプロペラに撥ねられ即死しました。この国民的英雄の死を軍部が隠蔽しようとしたため、その死因に疑惑が持たれました。ツクルスの場合はさらに衝撃的です。1941 年 6 月、ナチス・ドイツが前年 6 月からソ連占領下に置かれていたバルト諸国に侵攻すると（この 1 週間前には、約 2 万人のラトビア人がソ連奥地の強制収容所に送られていました）、ツクルスはラトビアの右翼組織アラーユス特別部隊（リンダ・ガルワーネさんによると、ラトビア語で Arājs Komanda と書くそうです。アラーユスはこの組織の創立者の名です）の一員としてホロコーストに関り「リガの虐殺者」と呼ばれました。戦後、南米に逃れましたが、1965 年、イスラエル諜報特務局モサドにより暗殺されたと伝えられています。

その後の人生に思いを馳せた時、二人の偉業が、来るべき時代の幕開けに成し遂げられた、夢のように明るく儚い出来事のように思えるのは私だけでしょうか。　　＜完＞

歸りも漫歩　ツ大尉出發

『東京朝日新聞』1937 年 6 月 10 日付け夕刊 2 面

＊ 本稿執筆にご協力くださった福田和美さんとリンダ･ガルワーネさんに感謝いたします。

★　写真展「世界を動かしたバルトの道」開催　★

於：在大阪ラトビア共和国名誉領事館
2010 年 11 月 15 日（月）～30 日（火）

名誉領事館では、一昨年の「歌の祭典の写真展」に続き、「バルトの道」(The Baltic Way)の写真展を開催しました。

1989 年 8 月 23 日、当時ソ連の支配下にあったバルト三国において、100 万人を超える国民が、互いの手を取り立ち上がり、「バルトの道」(The Baltic Way)または、「人間の鎖」(Human Chain)と呼ばれる独立を求める運動が行われました。

驚くことに、バルト三国の首都、リトアニアのヴィリニュスから、ラトビアのリガを経て、エストニアのタリンまでの約 600km にもおよぶ距離が、三国の国民の手で繋がれたのです。（参考：新幹線　東京～新大阪間　545km）

今回展示する写真は、当日の様子をカメラに収めた写真家たちの作品です。バルトの道（人間の鎖）は、当時の世界中の人々に大きな感動を与えましたが、20 年ほど経った現代でも一枚一枚の写真から、自由を求める人々の熱い情熱を感じ、われわれに感動を呼び起こします。この後には、独立を勝ち得た各国には「自由」の喜びが大きく沸き起こりますが、その直前の期待と不安の入り混じった緊迫した様子をモノクロームの写真が余すことなく伝えてくれます。

★92 回目の独立記念日おめでとうございます！★

ラトビア共和国独立 92 周年を祝してレセプションが開催されました
2010 年 11 月 17 日　於：駐日ラトビア共和国大使館

【ヴァイヴァルス大使を囲んで】
会場には、中曽根元外務大臣（日本ラトビア友好議員連盟会長　写真左上）ロシア大使（左下）、ツルネン参議院議員・大使パートナーの奥村さん・スウェーデン大使（中央下）、リトアニアの文化担当（女性の方）とリトアニア大使（右下）の姿もあり、ご参加の皆様は楽しく和やかなひと時を過ごされました。

オレグス・オルロフス書記官ご夫妻と
ご子息クリス君

ラトビア大使館で開催されたパーティに、東郷名誉領事はじめ協会のメンバーも参加され、独立記念日をお祝いしました。**左から上野慶三常務理事、石原理事、東郷武名誉領事、池田裕子理事**

【寄稿】交易都市リガ・中継貿易国ラトビア

長塚　徹様（ラトビア投資開発公社日本コーディネーター・当協会会員）

ロシアに源を持つ大河ダウガヴァは源流部で黒海に注ぐドニエプル河と接しています。この両河を行き来する形で、古来、西欧、北欧、ロシア東部、南欧間の交易ルートが発達していました。河口に位置するリガは、この貿易を支配する交易都市として繁栄しました。日本で言えば、大阪でしょうか。その後、中世にはハンザ同盟の主要都市として、ロシア、リトアニアの穀物、麻、中欧の塩、南欧からのワイン売買で繁栄しました。アレクサンドル大帝によりサンクト・ペテルスブルグが建立されるまでは、バルト海東部の最大都市として覇を唱えました。　ロシア帝国、大戦間の独立時代、ソ連時代も先進地域として学術、工業が発展しました。2004 年に NATO、欧州共同体に加盟しましたが、西欧、ロシア、ＣＩＳ諸国の狭間にあり、その地政学的地位を生かし、中継貿易地として発展しています。

国際社会は、アフガニスタンにおいて、タリバン等反政府勢力との戦闘を継続していますが、米軍の軍需物資（兵器を除く）の太宗は、リガ港に陸揚げされ、そこから鉄路にてロシア内陸部数千キロを通過し、アフガニスタンに輸送されています。こんなところにも、中継貿易地としてのラトビアの特徴が良く現れています。ラトビアは深刻な不況ですが、上記運輸業務はラトビアの国際収支に大きく寄与しています。

ラトビアの地方には自然が溢れ、織物、陶芸品、木工製品等豊かな手工業の伝統が残り、現代生活に生きています。１、２万人が合唱する**歌の祭典**、フォルクダンスは圧巻です。これらは、ユネスコの無形文化遺産にも指定されています。本年５月には関西日本ラトビア協会有志御一行がラトビアに来訪され、視察されました。多数の城、城砦も残っています。有志御一行が見学された**ルンダーレ城**が最大ですが、他にも、小ぶりなものが国中に散らばり、ホテル、催し物・結婚式会場として生かされています。

国内には、ラトビア系から始まり、ロシア系、ポーランド系、それからドイツの血を引く人もいて、民族構成は多彩です。民族衣装の飾りを見ると、北欧と瓜二つです。このため、教会もルーテル新教、カトリック、ロシア正教と各派の教会があります。最近は国家の重要行事には各派の合同ミサも行われています。お墓も宗派により差があり、墓地を歩くと、人の名前、墓の造りなど多彩です。以上、ラトビアは大変国際色豊かな国家です。

10 月 2 日に行われた総選挙では「統一」が大勝しました。バブル経済崩壊後厳しい緊縮財政、総需要抑制策が続き、不満が鬱積していますが、国民は**ドンブロスキス首相**を中心とする現政権を支持し、これを信任しました。現在、連立政権確立のため交渉中ですが、ラトビアがその特殊性、地政学的立場を生かし、国際貿易・中継貿易地として発展して行くことが期待されます。（了）

【長塚様夫人（前）ラトビア投資開発公社オゾルス長官（左）長塚氏（中央）石井参事官（右）】

ドンブロスキス首相

※参考

【2010 年ラトビア総選挙結果について】

ラトビアの総選挙（４年毎に実施、今次議会は 1991 年独立回復後第 10 議会となる）が 10 月 2 日執り行われました。各党の獲得議席は右のとおり（合計 100 議席）

【政党名】	【獲得議席】
統一	33 議席（現与党）
協調センター	29 議席
緑と農民連合	22 議席（現与党）
より良いラトビアのために	8 議席
VL-TB/LNNK	8 議席（現与党）

【解説】今回の選挙は、現与党、統一（新時代、市民同名、政治刷新同名２党・１グループが統合した政治組織）が、現有 25 議席から 33 議席へと大幅に議席を増やし大勝した。

33 という議席数は、1993 年に実施された第 5 議会選挙における「ラトビアの道」が獲得した 36 議席に次ぐ議席数である。国民の多くは、耐乏生活を強いる現政権に不満を感じながらも、現下の経済情勢や不況に対処するためには、これらの政策を継続するしかないと判断し**ドンブロフスキス首相**を信任する結果になったもの。

【寄稿】ラトビアン・エピソード：ソ連を崩壊させた音楽

田中　享様（元ラトビア大使館顧問）

ゆっくり話しをするのは雨の降る夜がいい。夕方、ラトビアの友人がぶらりと遊びにやってきた。市内のホテルに入り２階のバーに落ち着く。階下のロビーからジャズの演奏が聞こえてくる。演奏に品と味わいがある。きっとクラッシク音楽の奏者がアルバイトで外国人客のため弾いているのだろう。

友人が突然話しだした。「ジャズが聞こえてくるが、ソ連がロックやジャズで崩壊したという説を知っているかい？　本も出ているしBBCのドキュメンタリーもある」

「いや初耳だなあ。ソ連が崩壊したのはバルト三国が離脱したせいだという話はたくさん聞かされるがね」

「真相はそうじゃない。ソ連は内側から自壊したのさ。第二次大戦が終わると冷戦がはじまりスターリンはすぐに欧米の影響を一切排除するため、あらゆる欧米の文物を資本主義の退廃と決め付けて禁止した。そのなかには音楽もあった。ところが1955年ごろ短波ラジオは厳しく禁止されていたのだが、そのラジオを通じてリガにロックが入ってきた。その後フィンランドやスウェーデンの船員がリガやレニングラードの港にアメリカのロックやジャズのレコードを持ち込んだ。港には何でも入ってくる。港というのはそういうところなんだ。ちなみにソ連で一番最初にロック・バンドを作ったのは誰だったか知っているかい。ラトビア人のティーン・エイジャー二人だったと言われているんだ。ロシアのロックの歴史については本もある」

「フーン・・面白いエピソードだね。伝統的な西洋への窓の役割を果たしたんだね」

「知ってのとおりラトビアはワーグナーやブルーノ・ワルターも演奏していた国柄だ。それに西側への移民や亡命者もたくさんいる。ロックが密かにリガに入ったとしても不思議じゃない。西側諸国とのつながりは伝統的に強いんだ。ところがリガやそのほかの港から密輸入されたロックはあっという間に各地に広まった。とくにハンガリーなどの東欧で流行したといわれている。その後ビートルズの時代に入るとこれも人気となった。まるで免疫のない強烈な伝染病に感染したようだといわれた」

「当時蓄音機はあったのだろうか」

「物資は不足していたがボロの蓄音機はあった。ところがレコードをコピーする材料がどうしてもない。一人の医学生にアイディアがひらめいた。病院で捨てられる大量のレントゲン写真でレコード盤を作ったのさ。音質は悪く２ヶ月くらいしかもたなかったらしいがね…」

「日本でも昔、ソノラマといってペラペラな薄いレコードがあったよ」

「それだ。医学生は胸骨や骨盤が写っているレントゲン写真を丸く切ってレコード盤をつくり一枚１ルーブルで売ってぼろ儲けした。警察に捕まらないようにラベルは貼らずにちょっと印をつけてね。病院の地下などにＸ線出版とよばれたアングラ出版が雨後の竹の子のようにできたそうだ。この海賊版レコードには骨格がそのまま写っているため『骨のレコード』と呼ばれ、ロックやジャズをきくのを「シャリを聴こうか」といったそうだ。

「一説には闇市場で３００万枚も売られたという。本当だとすればすごい数だ。当局は音楽くらいとタカをくくっていたが、次第に大量に出回るようになり、慌てて取り締まるようになった。逮捕されるとシベリア送り７年の刑となった。しかし大切な点はソ連の体制に窒息していた若者の心をわしづかみにして西側への憧れをもたらしたということなんだ。ロックは自由の象徴だった。僕はまだ子供だったが、あの頃の大人たちの興奮と恍惚とした様子を思い出すと身が震えるよ。人々は、自由のない社会にますます失望していった。若者は争って新曲を求め、体制側の若い警官でさえ新曲アルバムが欲しくて売ってくれと後ろで手をだす始末となった。そのうちに若者たちはエレキ・ギターを演奏したくなり、欲しく欲しくてたまらなくなった。今度は電気工学科の学生の出番さ。彼らは市内の公衆電話をこわして磁石と部品を盗み出しエレキ・ギターを作りあげた。このためモスクワなどでは一時公衆電話が使えなくなった。アングラ・コンサートは大盛況だったが、若手最高の演奏家グループはつぎつぎと検挙されてシベリアに集まってしまったという。ところがシベリアの刑務所長のなかにはガキの音楽演奏くらい大目に見てもいいじゃないかと退屈しのぎに刑務所内でのコンサートを許可する者もでてきた。他方受刑中の若者も、刑務所長や地方当局の無知に付け込んで盛んに演奏するようになり、ついには各地の刑務所の間で交換演奏会や巡回コンサートがされたりするほどになった。こうしてロック、ジャズ、ビートルズは新しい社会現象となり次第に時代の流れとなっていったんだ」

友人の声に力が入った。「ロックやジャズは外に素晴らしい自由な社会が繁栄しているのだということに気づかせた。多くの人が直感的にこれじゃもう共産主義は長くはもたないだろうと感じたんだ。もともと東欧やバルト三国では、密かに自分たちの真のアイデンティティーは西ヨーロッパに属しているのだと自負している人が多かった。バルト三国だけじゃない。ソ連が変化していくことについてはみんなが息を凝らしてじっと見守っていたんだ。考えてみれば人間の本性をまったく無視したソ連の共産主義が７０余年続いたことのほうが奇跡だったというほかない」

「なるほどね。ソ連が崩壊したことについてもいろいろ見方があるんだなあ」

２０世紀に世界を震撼させたソ連共産主義とは何だったのか。ソ連は崩壊しロシア連邦に変わったがロシアは変わったのか・・・独立したがいまだ過去の負の遺産に苦しんでいるラトビア・・・

演奏は一段落して静かな余韻のある曲に変わったが、降りしきる雨はやまない。（了）

【編集後記】今回はお二人のラトビア臨時大使経験者である田中様と長塚様に寄稿をいただき、現在のラトビア大使からの応援メッセージも紹介させていただきました。また数少ないラトビア文学の翻訳家として活躍される黒沢歩様、日本ラトビア音楽協会（会長加藤春男様）で随時ラトビアに関する情報を発信されておられる徳田編集長ほか本協会を通じて多くの皆様のご支援をいただき発行することができました。改めて御礼を申し上げます。

長塚様は、長年北欧の専門家として外務省に勤務され、最終赴任地のラトビアの魅力に魅せられ退官後、ラトビアと日本の経済的な関係発展に尽力されておられますが、その豊富な外交官としてのご経験を踏まえ以下のように述べておられます。

【昨年 11 月に植樹したラトビア産シラカバの苗（神戸市立森林植物園）

「日本はもっともっと国際化し、国際的にその存在を明らかにする必要があると思います。円高もあり、日本企業は否応なく外国に展開を始めていますが、これを成功裏に進めるためには、人との付き合いを疎かにできません。日本人はもっともっと外に出て、世界各地に永住、長期滞在し、各国民との付き合いを深める必要があると思います。そうすることが日本のため、日中関係、アジアのためになり、また世界平和に貢献することになると思います。」

世界平和というと高邁すぎる話かもしれませんが、ご縁があってラトビアという国と関わることになったわれわれも、微力ながら日本が国際社会でプレゼンスを高めることにつながる活動ができればと思います。昨年上野慶三様がラトビアから持ち帰られたシラカバの木が神戸市森林植物園で育っています。まだまだ小さな木ですが、われわれのラトビアとの交流の記念樹としても末永く見守っていきたいと思います。

関西日本ラトビア協会会員一覧（敬称略　50 音順）平成 22 年 12 月現在

青柳　千代廣
浅井　公平
浅野　敏行
朝本　福穂
芦田　雅行
阿部　雅子
荒木　美眞
荒牧　英樹
有友　美智男
池田　裕子
石垣　豊
石橋　しゅん一
石原　美生子
井手　正敬
市嶋　久嗣
市村　浩一郎
井上　昭二
今城　孝司
岩崎　信一郎
上北　耕司
稲垣　研三
植田　多江子
植村　義昭
牛島　国夫
榎本　昌浩
江間　範夫
上野　龍平
尾崎　由佳
尾上　輝美
大國　利雄
大野　美保子
岡田　博
岡田　安路
岡林　昌弘
岡本　健
海堀　芳樹
加賀　昌一
片岡　みどり
片山　千絵子
加藤　啓子
加藤　隆一
金井　雅孝
金光　清行
河合　令子
河﨑　圭亮
川端　康平
来田　登喜子
北山　幸治
北山　秀俊
木下　大洋
木下　武幸
木挽　司
木村　咲子
木村　至宏
清村　勝也
粂　悦子
黒川　省二
小石原　昭
康　浩郎
小原　英明
小林　正明
小山　泰三
小山　昌身
紺谷　達也
権藤　眞禎
佐々　美汎
酒見　信義
笹井　幹男
佐々木　実
佐竹　竜俊
茂森　邦嘉
清水　郁美
下地　彰夫
荘　雅弘
正司　泰一郎
白木　哲次
末田　恵得
杉村　秀夫
杉本　和子
杉山　良夫
住江　六郎
滝本　収
竹村　肇
橘　英三郎
立花　修
立岡　弘
田中　健造
田中　立子
谷　義一
高野　武法
田中　立子
谷本　瑞絵
寺岡　志郎
東郷　武
東郷　久野
富永　章之
鳥尾　二郎
ドミトリス・ベロウーソフス
中垣　喬子
長瀬　博享
長塚　徹
中西　雄生
長久　智子
中村　きさ子
中村　雅夫
長村　文夫
中山　三喜子
成瀬　康夫
西尾　武
西尾　正憲
西田　鶴男
西村　達志
根津　耕一郎
野井　一正
灰田　昌美
濱田　諭稔
濱田　賢時
濱田　諭奈
早川　明弘
原　登久子
東田　正己
樋口　武男
樋口　敬和
日比　富美子
平井　義孝
平越　國和
平本　奈穂
藤田　凱三
藤原　和之
藤本　栄治
藤本　昌男
藤山　かよ
古海　賢二
風呂本　武敏
堀田　健二
本多　敬一
益田　信行
松下　桂三
松本　宏
水谷　隆之
三宅　康彦
村上　健治
本島　昭男
森　寛一郎
森田　俊作
森脇　洋子
薮田　雄三
安田　勝
山口　利幸
山崎　俊輔
山下　博史
山田　助太郎
山田　弘光
山原　一晃
山本　敬子
山本　靖
山本　理恵
湯上　敬明
横山　晴貴
横山　浩明
吉村　義治
吉村　セイ子
米田　裕子
脇山　廣三
和田　弘
渡辺　範子